

「場所の力」と「人間力」の相互浸透による〈まちの縁側〉形成 —高齢少子社会における住宅市街地再生の研究—

主査 延藤安弘*1

委員 村田尚生*2、*9, 黒野雅好*2, 坪井俊和*2, 濱崎裕子*3, 倉原宗孝*4, 福田由美子*5,
森永良丙*6, 田中宏実*7, 小杉学*8, 新井信幸*8

〈まちの縁側〉とは、内と外の境界のとけた、小規模多機能混在の、出会いと交流のある柔らかな居場所のことである。本研究は、市街地内に立地する既存住居・店舗・公共空間等のストック活用による〈まちの縁側〉の典型事例をすくいあげ、高齢少子社会における住宅市街地再生につながる可能性を考察した。〈まちの縁側〉づくりは、捨てられていたものが新しい状況のもとでそのあり方を求めてリフォームされるとともに、ヒト、モノ、コトの相互作用豊かな高次元空間としての「場所」の力が回復・再創造されるプロセスである。それは「作られたもの」から「作るもの」へと変容させる主体的能動的営みである。そのことにかかわる住民・専門家らは、事実的なものと感覚的なもの、自己と他者の間の柔らかな関係のおもむきに共感する「人間力」を育くむ。

キーワード：1) まちの縁側, 2) ストック活用, 3) 再生, 4) 相互作用, 5) 相互浸透,
6) 場所の力, 7) 人間力

FORMATION OF COMMUNITY ENGAWAS THROUGH THE TRANSACTION BETWEEN THE “POWER OF PLACE” AND “HUMAN ABILITY”

—A study on the rebirth of urban residential areas in an aging society with fewer children—

Ch. Yasuhiro Endoh

Mem. Takao Murata, Masayoshi Kurono, Toshikazu Tsuboi, Yuko Hamasaki, Munetaka Kurahara, Yumiko Fukuda
Ryohei Morinaga, Hiromi Tanaka, Manabu Kosugi and Nobuyuki Arai

A *community engawa* refers to a flexible, small-scaled place where, with the boundary between the inside and the outside being dissolved, a multitude of functions mingle together and a variety of encounters and exchanges take place. This study intends, by taking up several typical instances of *community engawas* which utilize existing stocks of dwellings, shops and public spaces located in urban areas, to consider a possibility that these *engawas* will lead to the rebirth of urban residential areas in an aging society with fewer children. The making of *community engawas* is a process where things which have long been abandoned are reformed in search of roles they can play under new circumstances, and the “power of place” is thus revived and re-created; the power these places recover as high-dimensional spaces where vivid interactions take place between people, things and events. It is a positive and voluntary action which transforms “something already made” into “something we make”. Among residents and experts engaged in this undertaking is nurtured a “human ability”, which allows them to understand subtle shades of soft relationships between the rational and the sensuous as well as between self and others.

1. はじめに—研究の目的

高齢少子社会では、地域社会が彼らの住まうことと生きることを相互に支援するしくみが不可欠である。そのことにより、高齢者や子どもは日常のくらしのリズムの中で自らの生命と住まい方を豊かに育くみつけられる。これからの相互支援型社会にあつては、子どもから高齢者までの多世代が居住地で自ら出会い、交流できる場と機会をえることにより、ひとりひとりの住み手がよりよく生きる条件を獲得していく。

一方、現在の住宅市街地には空家・空店舗が相当数みられるとともに、居住地における既存の公共空間は必ず

しも生き生きと使われることなくデッド・スペース化している傾向が強い。これらの *vacant and dead space* (ユーザー利用から見放された空間) に、子どもからお年寄りまでの多世代のユーザーの利活用が触発されるプロセスデザインをしくむことにより、捨てられていた空間が人々の活動の息づく場所に変容していく状況づくりが必要である。

打ち捨てられていた冷たく固い *space*・空間を、ユーザーの多様な利活用によってあたたかく柔らかな *place*・場所に変容させていくことが、高齢者や子どもの安心感を高めることになる。ここでいう “*place*”・「場所」と

*1 NPO法人まちの縁側育くみ隊 代表理事

*2 同理事

*3 長崎国際大学 助教授

*4 岩手県立大学 助教授、

*5 広島工業大学 助教授

*6 千葉大学 助教授

*7 千葉大学 技術補佐員

*8 千葉大学 大学院生

*9 愛知学院大学 助教授

は、住み手・ユーザーの感情・ふるまい・記憶・自発性といったものが付加された多義的な場のことをいう。ところで、「場所」をキーワードにした最近の論考で注目されるのは、ドロレス・ハイデンの「場所の力」注1)である。彼女のいう「場所の力」とは、「都市の景観に秘められた力、市民がもつ社会の記憶を育む力」と意味づけられたが、ここでは基本的にはそれに触発されつつ、マクロな都市景観という広がりよりも、住み手のミクロな生活景観にこめられた記憶を育む力という意味で使う。記憶という人間の生命の重要な側面を育む「場所の力」をひきだすのは、そこにかかわる利用者と専門家など多様な人々の想像力、活動力、洞察力などである。そのことを「人間力」というならば、打ち捨てられている空間が「人間力」によって「場所の力」が呼びさまされ、両者の相互浸透は、ソフトとハードの相互作用が自然に生成する独特の開かれた場所を生み出すことになる。このような communal place、即ち、ともに在る・居ることによりくつろぎ感が得られる場所を、本研究ではくまの縁側>と呼ぶ。注2)

ここでいうくまの縁側>は、直喩的に物理的「縁側」を指すのではなく、内と外がとけるやすらぎのある、休息とともに応接にも作業にも使える、ふらりとやってくる人々を包みこむ、などの「縁側」のもっているメタファー（暗喩）としての意味である。くまの縁側>とは、内と外の境界のとけた、ぬくもりにひたされた小規模多機能のまざりあいの柔らかな場所のことである。

くまの縁側>の空間利用は、「私」を開いて「共」としたり、「公」の境界を開いて「共」に変容することにより、閉じた固い「空間」を開かれたやわらかい「場所」に生成するという利用面の最適化を図ることに特徴がある。

今日の住宅市街地にみられる多様な vacant and dead space を、こうした意味のくまの縁側>に変容・改造・育成することにより、加えて、「私」的空間を周りに開くことにより、子どもから高齢者までの多世代連携のコミュニティを再生することとなる。

本研究の目的は、「場所の力」と「人間力」の相互浸透によって生成するくまの縁側>の必要性と可能性を考察・構想し、高齢少子社会における住宅市街地・コミュニティ再生の新しい方法の有効性を検証することである。

2. 本研究の方法

2.1 調査対象の類型化

開発・フローの時代の20世紀から、ストック活用・育成の時代の21世紀へという時代の流れの中で、くまの縁側>は、地域資源としての空家・空店舗などの有効活

用により、まちの衰退に歯止めをかけ、人もまちも元気になるまち育てにつながる状況づくりが大切である。

こうした背景のもとに、多様なくまの縁側>が成立しつつある。そこでそうした空間を類型化してみると、民間空間と公共空間に先ず区分けされるとともに、前者には住居系空間活用型と商業系空間活用型がある。さらに、それらは内部空間中心型と外部空間中心型がある。このように所有・管理軸としての公・民と、空間領域としての内・外の二軸からなるくまの縁側>分類表ができる。ここに、くまの縁側>と考えられる事例をあてはめてみると、表2-1のようになる。全体に、民間の既存住宅の活用型と商業空間活用型のケースが多い。公共空間にも住宅団地や公園などにくまの縁側>的活用がみられる。

2.2 事例調査の対象

表2-1にみられるくまの縁側>事例の中から、ケーススタディの対象として、既存空間の型、多機能混在、出会いと交流の豊かな典型事例16を選んだ(図2-1)。

2.3 調査方法

16 ケースについては現地調査を行ない、基本属性や活動状況等の資料収集、活用と「場所の力」等の観察、人間関係や人間力等のヒヤリングを行なった。

さらに2 ケースについては、調査者自らがそれぞれの縁側活動のスタートから今日に至るまでの状況づくりの担い手として、インサイダーとしての評価・分析を行なった。そこには、Participant Researcherとしての参加型調査の方法が意識されている。



図2-1 調査対象16事例の地域分布

表 2-1 <まちの縁側>分類表

領域		内部空間中心		外部空間中心
民間空間	住居系活用型	① 木附の里・ふれあいPUB (愛知県春日井市) ② まちの縁側MOMO(名古屋市東区) ③ NPO笑顔(福岡市南区) △ 浜田のまちの縁側(島根県浜田市) △ 縁側サミット(三重県鈴鹿市) △ とねりこの家(京都市上京区) △ ぼちぼち長屋(愛知県長久手町) △ 高齢者グループハウスほっと館 (東京都江戸川区)	△ くれよんBOX(名古屋市昭和区) △ クニハウス(名古屋市千種区) △ メディウム(名古屋市北区) △ 鑑舎(愛知県春日井市) △ あんきやリビング(岐阜県高山市) △ ハナさんハウス(川崎市川崎区) △ 瑞穂デイセンターえんがわ (名古屋市瑞穂区) △ 佐倉こどもステーション (千葉県佐倉市)	
	商業系活用型	④ 高齢者こんにに・ばじる(北海道美幌町) ⑤ のっぽろまち育てプロジェクト (北海道江別市) ⑥ ギャラリー ライク・エア(名古屋市北区) ⑦ 空町昼市(岐阜県高山市) ⑧ 三八屋(愛知県一宮市) △ おっこうや(高知県赤岡町)	△ 雁ぶらサロン・雁ぶらショップ (名古屋市瑞穂区) △ ピンボンハウス(名古屋市天白区) △ 上土手スクエア(青森県弘前市) △ なちゅ(愛知県半田市) △ からほり倶楽部(大阪市中央区) △ 着物の工芸マジマヤ(名古屋市西区)	⑨ 北の屋台(北海道帯広市) ⑩ らくらくえんオフィス(広島市佐伯区)
公共空間	団地型	⑪ ふれあい喫茶・グリーングラス (東京都武蔵野市) ⑬ 秋津小学校コミュニティルーム(千葉県習志野市)		⑫ 西小中台オープンカフェ (千葉市花見川区) ⑭ 草津まちづくり交流広場(広島市西区) ⑮ 長屋門公園(横浜市瀬谷区) ⑯ 京橋川オープンカフェ通り (広島市中区)
	一般型			

(注) ①～⑯: 本論における典型事例比較の対象、㉑ 詳細考察の対象、△その他

3. ケーススタディにみる<まちの縁側>特性

16 のケーススタディの調査結果を、相互比較のうちに<まちの縁側>特性を把握するために、表 3-1 に集約した。項目別に以下に特徴を解説してみよう。

3.1 立地特性

都心・市街地立地のものが 9 事例、郊外立地のものが 7 事例であり、全体にまち中にコミュニティの元気を回復・再創造せんとするものが多くみられる。

3.2 規模特性

建築的内部空間活用型のものでは、かつての天ぷら屋という小店舗を改造した⑧三八屋のように、4 坪 (13.2 m²) という小規模のものから、最大でも秋津小学校コミュニティルームにみる 260 m²程度であり、全体に比較的小規模である。外部空間活用型では、最小西小中台オープンカフェの 75 m²、最大⑮長屋門公園の 3.5ha である。

3.3 空間特性

既存空間のリノベーション・再活用型が 12 事例にのぼり、全体にストックの有効活用に特徴がある。住居系としては、古い歯医者、ゲタバキアパートの改造、商業系としては、古い自転車屋、天ぷら屋などの空き店舗改造がみられる。公共空間では、小学校空き教室活用や、公園での伝統的家屋群の再生・配置による活用などがみられる。他の 4 事例も、⑨北の屋台のような中心商店街の火事の焼跡の活用から、①ふれあい PUB のコーポラテ

ィブ住宅のリビング活用に至るまで、全て、既存空間の新しい視点からの活用・使いこなしである。

<まちの縁側>は、幅の広い既存空間の改造・再利用により人々の出会いと交流を活性化させる場である。

3.4 動機特性

外在的動機としては、全体に共通して地域住民の高齢化、人間関係希薄化、空店舗増加、市街地の衰退等の危機感である。内在的動機としては、⑥ギャラリーライク・エアのように、現代文明の機械主義を反省して、手づくり文化への志向、⑧三八屋のように、「三八市」という地域の歴史的伝統の回復・再創造志向、⑬秋津小学校コミュニティルームのように学校と地域の融合によるコミュニティ運営志向など、各ケース固有の内発的まち育ての志が特徴的である。

3.5 機能特性

<まちの縁側>の機能に着眼してみると、出会いと歓談と交流は全てに共通している。加えて、プロジェクトによって特色があるが、飲食、制作、演奏、展示、鑑賞、販売、学習、癒しなどの多面的役割のひろがりをもっている。これらの機能の組み合わせは、ケースによって特異である。③笑顔は、民間デイサービス、子ども文庫、コミュニティレストラン、様々な文化教室等、⑤のっぽろは、縁側サミット、子ども土曜学校、「軒先ジャック」(商店前でのパフォーマンス)、食事会等、⑮長屋門公園は、昔ながらの年間行事、伝承行動を中心に、年間 6 万人が「むかし」に会いにくるといった格別な出会

表 3-1 典型事例の特徴比較

タイプ	プロジェクト名	1 基本属性		2 内容概要		3 動機	4 コスト(2003年)
		・立地条件	・所有者	・場所特性	・利用特性		・資金
		・立地タイプ	・運営主体	・家賃			
		・開始年	・利用空間面積	・収支			
a 戸建住宅型	1 ふれあいPUB	・春日井市木附町	・黒野雅好氏	・コーポラティブ住宅木附の里の一角	・クロスクラブから発展 ・高齢化が進むNTでのたまり場づくりへ	・自宅活用、飲食持寄りのため、経費発生せず	
		・郊外	・同上	・高蔵寺ニュータウンのまち育てに興味をもつ人々が月に1回1品持寄り集う			
		・1995年	・40㎡				
b 既存家屋再生型	2 まちの縁側MOMO	・名古屋市東区代官町	・可知氏	・古い歯医者さんの木造家屋の一角を改装	・「檀木館育くみ隊」の活動の機縁 ・一宮市市民参加型公共施設設計へのかかわり	・NPOオフィスも含めて家賃20,000円 ・収入16万円、支出4万円	
		・都心部	・NPO法人まちの縁側育くみ隊	・地域住民が立ち寄れるサロン、ギャラリー。行政などとの打合せの場ともなる			
		・2003年	・35㎡				
c 空店舗活用型	3 笑顔Co-mix	・福岡市南区長住	・NPO笑顔	・古いゲタバキ住宅の改装	「宅老所“よりあい”とともに新しい老人ホームをつくる会」を結成し、運営展開	・社協から年100万円助成 ・家賃6.5万円 ・±0	
		・郊外団地	・同上	・民間デイサービス、子ども文庫、コミュニティレストラン、様々な文化教室等			
		・2000年	・187㎡				
	4 高齢者こんにに「ば・じ・る」	・北海道美幌市	・協同組合高齢者こんにに	・空店舗改修	・中心市街地の衰退 ・高齢社会への対応の悩み ・地区外専門家からの触発	・当初補助金 ・活動を持続できるだけの収益	
		・中心市街地	・同上	・地元のボランティアに支えられながら、町内の住民の憩い、情報の共有の場として定着			
		・2001年	・187㎡				
	5 のっぽろまち育てプロジェクト	・北海道江別市	・商店街	・空店舗改修	・地区外からの刺激 ・縁側サミットへの地元主婦を中心とした住民からの大人気	・当初補助金 ・市からの補助	
		・中心市街地	・まちづくりグループACEを中心とした地区内外住民	・縁側サミット、サタデーのっぽ、軒先ジャック、月一迷店など多様な活動			
		・2002年	・40㎡				
	6 ギャラリーライク・エア	・名古屋市北区大曽根	・家主	・従前自転車屋の店舗改装	・これまでの機械主義を反省して、手づくりの焼物と付き合う	・出資者2名(48万円) ・家賃10万円 ・売上30万円(50%収入)	
		・市街地	・小川茂氏(店主)				
		・2000年	・約100㎡				
	7 空町屋市	・高山市空町	・地元経営者	・空店舗リノベーション	・高齢者増加と空店舗増加 ・「高山市まちづくり・住まいづくり研究会」の活動から生まれる	・改修費は助成金 ・家賃無料 ・出展者独立採算制	
		・中心市街地	・飛騨地域研究会	・高齢者向けに新鮮な野菜や日用雑貨を月2回程販売			
		・2001年	・土間+座敷計約80㎡				
	8 三八屋	・一宮市本町	・桜井氏	・4坪の空店舗(天ぷら屋)	・三八市という歴史的にぎわいに思いをはせて、多様な市民のコミュニケーション空間を目指して	・家賃6万円 ・収入10万円、支出4万円	
		・中心市街地	・星野博氏(店主)	・時間シェアショップ、日によって店主がかわり、喫茶店、地ビール屋、ギャラリー、工房など			
		・2001年	・13.2㎡				
d 商業空間活用	9 北の屋台	・北海道帯広市	・北の起業広場協同組合	・540㎡の小街区に20屋台	・中心市街地衰退の危機感 ・市のTMO事業をきっかけに外部専門家との議論	・3000万補助金 ・レンタル約50万 ・オリジナル約200万円	
		・中心市街地	・同上	・食品種毎に4ブロック、東西の間口を各商店街通りに面し、地区内外からの客で賑わう			
		・2001年	・540㎡				

5 縁側活動	6 場所の力	7 人間力	8 今後の課題	9 キーワード	プロジェクト名
	・空間リフォーム前後の特徴 ・記憶のよびさましとしての場所の特性	・関わる主体、キーパーソン ・人間模様 ・地元の発想力・洞察力			
・コーポラティブの勉強会、地域通貨「高蔵寺ふれあい手帳」の発行 ・子どもを対象として「お泊り会」など	・住居のリビングルームが集会所のように開かれている ・共用の道側に開かれ、内外一体となった建物は「縁側」そのもののような場	・黒野氏(住民)、寺島氏(設計者)、林さん(ミニコミの編集) ・子連れの参加が多く、多世代交流の舞台	・今は一定の役割を終えて一時休止。住民主体のタウンマネジメントを目指して次なる仕掛けを模索中	コーポラティブハウス ふれあいPUB ネットワーク	ふれあいPUB
・NPOの縁側の役割(くつろぎを感じる打ち合わせ空間) ・1年間に13回にわたるギャラリー活動、縁側サミット、おしゃべり幸房など	・診察室、技工室の再利用にあたり、エコロジカルな工夫 ・古い木造空間の親密感にいつそう優しさを添えた ・表と裏の間に中庭がある	・土屋さん(主婦)、ボランティアアスタップに女性が多い ・思いがけない創作経験が文化的存在に至らせる ・表現、制作、評価、交流は相互敬愛の関係を生む	・「私」と「他者」のユーズムゲな関係の中でコミュニティを育んでいくこと	古民家再生 コミュニティ アート 表現 相互敬愛	まちの縁側MOMO
・民間デイサービスの高齢者同志の交流が盛ん ・子どもが「自ら選んでいく」子ども文庫、将棋教室 ・子ども料理教室は多世代交流の場	・1階店舗は壁を撤去してデイサービス ・元駄菓子屋、散髪屋などの「コミュニケーションを生みやすい」「下町的な人情味のある」「生活そのものを包みこむ」要素をひきついでいる	・「夢を追う」古賀氏、バックアップする田中氏、専門家浜崎氏 ・「笑顔」はドラマの連続、笑いのたえない時間の流れ ・「思えばできる」という取組みへのポジティブな姿勢	・「笑顔」の力で難しい課題をひもとき、ストーリー性のあるcomixのような笑いをさそうおらかさをさらに高めていく	宅老所 子ども文庫 コミュニティ レストラン 混ざり合い	笑顔Co-mix
・地元住民の趣味、特技が多様に日常的に展開(そば打ち同好会、おしるこ等) ・イベント(クリスマス、まちづくりコンクール等)	・荒れた空店舗を住民による自由造作 ・当初広すぎると思われていた空間も手狭になるほど使いこなし ・囲炉裏、畳の活用	・3年間の学習の中で地元キーパーソンあらわる ・自覚的な生活者、まちづくり人が育まれてきた ・地域住民による自主運営	・1周年、2周年記念と持続的に運営展開、各賞受賞など地元活動にも少しずつ浸透、さらなる展開へ	中心市街地 高齢者 日曜大工 創作活動	高齢者こびに「ば・じ・る」
・縁側サミットの作品が通りに彩りを添える ・サタデーのっぽの子どもの土曜学校での制作活動 ・月一迷店の食事を楽しむ男衆など	・店舗改装に加えて食事室、キッチンを増築 ・高齢者や男衆の実験的な食事会の場により和みのある場に育ちつつある	・地元主婦がコアメンバー、地区外専門家が支援 ・商店主たちを触発 ・主婦、子どもたちの制作活動の創造的気運	・市の事業(顔づくり事業)とも連動しつつ、町並み整備事業などハードとのつながり	中心市街地 空店舗 子ども 大学生	のっぽろまち育てプロジェクト
・イベント企画(まち再生塾、つかのまのこどもの居場所) ・店主と客の関係、8割が女性、お茶を出して長話 ・店主と近隣の関係、外と内がつながっている、声のかけあい	・まちなみ再生塾というワークショップを開いて改装 ・中学生の体験学習の場 ・土壁、漆喰、筋交い入れなど。「打ち水」	・小川氏の私発の活動 ・手づくりの循環のスローライフ ・自立した個人の存在と、もたれあいではない創造的化学反应	・まちなみ再生塾を行ないつつ、カフェなどの新たな展開を検討中	古民家再生 ギャラリー セルフビルド	ギャラリー ライク・エア
・気軽にフラリと寄れる拠点 ・高齢者を中心とした地域住民同士が出あう	・元お菓子の製造・販売店のコンクリートたたき活用 ・土間スペースが立ち寄りやすさを生んでいる ・「近所の人がこれだけ顔を合わせる機会がめったにない」(企画者)	・キーパーソンは飛騨地域研究会のコアメンバー ・近隣住民も好意的に迎えてくれる ・押し付けがましくなくやる	・ロールモデル、プレイモデル、ビジネスモデルの視点からの検討	空家・空店舗 中心市街地 高齢者	空町昼市
・表現活動、商業活動の場 ・食、音、創をわかちあう場 ・出会い、交流、創造の市民活動の拠点場所	・「てんぷら屋」を「まち遊び」仲間のアーキテクト・ビルダーにより改装工事 ・家具は一宮の繊維工場で使われていた大きな作業テーブル、それを囲炉裏を囲むように「車座」空間	・星野博氏は自らの活動を「まち遊び総研」と称す ・地域内外で志をもって能動的に活動する「志民」 ・人、情報、ココロザシの多重的な交流	・中心市街地活性化の試みとしてのまちの縁側の可能性をひろげる	時間・空間 ネットワーク 自己実現 志	三八屋
・屋台内での食と会話がはずむ ・街区(屋台群)としてイベント実践(季節の食材、大道芸等)	・もとは火事で焼失した地元市場 ・屋台空間そのものに親密さがあり、技術的(寒さ対策)制度的(保健所等)の課題をクリアー	・地元住民有志、行政、外部専門家の協働 ・屋台の人々の賑わい ・ねばり強く、かつ楽しく遊びながら試行錯誤	・中心市街地の再生効果の波及	中心市街地 屋台 食 共同組合	北の屋台

タイプ	プロジェクト名	1 基本属性		2 内容概要	3 動機	4 コスト(2003年)
		・立地条件	・所有者	・場所特性		・資金
a 商業空間活用型	10	・立地タイプ	・運営主体	・利用特性		・家賃
		・開始年	・利用空間面積			・収支
e コモンスペース活用型	10	・広島市佐伯区楽々園	・KK広重ストア	・ショッピングセンターの一角	・広重ストアがSCの増床工事 ・住民と行政の出会い ・高齢者の増加	・年15万円の寄付金
		・住宅市街地	・らくらくえんオフィス協議会	・お年寄りに電動スクーターを貸し出すサービス		・家賃なし
		・1999年	・16㎡			・バッテリー積立金 年12万円
	11	・武蔵野市緑町パークタウン	・都市再生機構	・団地集会所のラウンジ	・団地建替えに伴い、近所づきあいが減り「寂しい」の声上がる	・ラウンジ利用料金無料
		・賃貸住宅団地	・団地自治会	・カフェ風集会所のラウンジ、ウッドデッキを利用してふれあい喫茶を月1回開催		・月1万円の売上
		・2001年	・76㎡			
f 空教室活用型	12	・千葉市花見川区西中台	・団地権利者990名の共有地	・団地の中心広場	・団地建替え計画の検討過程で「ソフト」の重要性に住民が気付く	
		・分譲住宅団地	・団地自治会	・月1回程度日曜日の午後に仮設的にオープンカフェを開く		
		・2002年	・75㎡			・±0
	13	・習志野市秋津	・習志野市	・秋津小学校空教室(余裕教室)	・1990年生涯学習指定校になったのを機に活動が始まった	・住民による自己管理でコスト削減
		・郊外団地	・秋津小学校コミュニティルーム運営委員会	・学校と地域の融合によるコミュニティルームの運営		
		・1995年	・約260㎡			・他約年3万円
g 公共空間活用型	14	・広島市西区草津	・広島市(事業用地)	・市有地の空地活用	・毎年夏の「まちかどオープンミュージアム」をさらに日常的に生かすために市とかけあう	・広島市が整備費支援
		・郊外住宅地	・草津まちづくりの会	・広場としてセルフビルドで住民が整備、まちの情報発信、交流拠点の場		・家賃なし
		・2003年	・92.4㎡			
	15	・横浜市瀬谷区阿久和川	・横浜市	・長屋門、民家、蔵に囲まれた広場	・長屋門公園の運営事務局長に最適任の住民が選任された	・市からの運営費 年900万円
		・郊外住宅地	・住民が組織する運営委員会	・昔ながらの年間行事、伝承行事を中心に、年間6万人が「むかし」に会いにくる		・人件費2人分と光熱費
		・1992年	・公園3.5ha			・メンテナンスはボランティアによる
	16	・広島市中区京橋川周辺	・広島県(河川管理者)	・河川緑地	・行政の「水の都整備構想」 ・ホテル事業者の河岸活用	・カフェ経営者は事業協賛金を支払う
		・中心市街地	・京橋川水辺のまちづくり委員会	・2ホテルがオープンカフェテラスを6月～10月の間開設		・店舗は自前で用意
		・2000年	・140㎡/125㎡			

と交流の場を確立している。⑧三八屋のように「時間シェアショップ」として、日によって店主が変わり、喫茶店、地ビール屋、ギャラリー、工房など時間的多機能混在というケースもある。〈まちの縁側〉は、小規模多機能混在のモノ・ヒト・コト・トキ交流の場であるといえる。

3.6 場所の力

元の店舗や住居の空間的性格が生かされ、土間や縁側等のもっていた内と外の境界のとけた開放性、表と裏の中間にある庭や囲炉裏等の人々の気持ちを集め和ませる親密性、土壁、漆喰など古い木造空間のもつ優しさ、道端への打ち水やクーラーに頼らない通風などの身体的快適性、等の〈まちの縁側〉固有の居心地特性がみられる。

さらに、多くが住民たちのセルフビルドによって改造され、加えて、専門家が古い空間の価値を解釈し、それを創造的に継承するデザインセンスが生かされていることもその改装・改造プロセスの特徴である。

こうした空間の開放性、親密性、優しさ、身体的快適性、セルフビルド性、創造的継承性などは、住み手のミクロな生活景観にこめられた記憶を触発し育む「場所の力」の回復・再創造につながっている。

3.7 人間力

ご縁があつて〈まちの縁側〉を志し、運営し、そこに参加する人々は、出会いと対話を楽しみながらコトを進めていくことにより、「場所の力」に触れて幼老ともに各世代とも気持ちが晴れわたり、自己と他者の間に開か

5 縁側活動	6 場所の力	7 人間力	8 今後の課題	9 キーワード	プロジェクト名
	・空間リフォーム前後の特徴 ・記憶のよびさしとしての場所の特性	・関わる主体、キーパーソン ・人間模様 ・地元の発想力・洞察能力			
・スクーターの常連利用者は貸出の前後にスタッフとおしゃべり ・おもてなしの場としてお茶、お菓子が用意されている。	・目立つ場所に位置している、オフィスからマン・ウォッチ ・声をかけあえる関係	・ボランティアスタッフも高齢者、生き甲斐、生活のハリ ・熊谷氏が区役所でタウンモビリティの可能性を知る ・住民自前の力による実施	・住民だけの運営の限界。行政、企業、学校、NPO 等との連携	高齢者 電動スクーター ショッピングセンター	タウンモビリティ らくらくえんオフィス
・住民のふれあいの場 ・コンサート、ギャラリー活動などのイベント	・開かれたおしゃれな場づくり ・非目的利用の場所には、老若男女がふらりと気軽に寄れる機会を増やす	・自治会幹事の女性(50代)、グラフィックデザイナー女性 ・都営住宅入居者、周辺住民とも交流 ・ゆるやかな個人主義の連携、おしゃれ心、質へのこだわり	・今後も多様な人材発掘を続けていく	カフェ 団地集会所 非日常的空間	ふれあい喫茶 グリーングラス
・一人でふらりとやってくる高齢者には、なるべく声をかけたり話し相手になってあげる	・井戸端会議のような場所 ・団地中心広場にはパーゴラがあるので、野外カフェを開くのにちょうどよい空間が形成されている	・3人の主婦をはじめ住民ボランティア ・高齢者だけでなく、子どもや若いお母さんたちも交流 ・誰かが誰かのためにやるのではなく、できる範囲で展開	・仮設から常設の場になるか否か	郊外型分譲 団地 共用空間 オープンカフェ 団地再生	西小中台団地 オープンカフェ
・土、日曜の会員どうしの交流(食事会) ・様々なサークル活動 ・工作クラブメンバーによる日曜大工等	・4部屋をコミュニティルームとして活用 ・父親・中高生の居場所 ・学校とコミュニティルームの間はシャッターをつけて時間外管理をスムーズに	・地域住民、校長など ・知恵と技の出しあい ・共に楽しみ継続していける活動	・まちづくりについて多くの人をさらに育むこと	小学校 空教室 コミュニティ ルーム 学社融合	秋津小学校 コミュニティルーム
・日常的に子どもやお年寄りたちがおしゃべりする広場 ・地元住民が描いた絵や子どもの作品の展示の場 ・総合学習の時間の小学生の休憩の場	・セルフビルドで作った広場(大工さんの指導を受けて) ・オープンな空間ではあるが、普段は誰もいないためアルジ性がなく、人が集まる拠点にまでなっていない	・地元の中心メンバー10名ほど+専門家、大学生 ・広場ができて、10年間途絶えていた地元の祭りが復活した ・よそ者にも御興を担がせる開放性	・作る過程は縁側であったが、使う過程を縁側にしていけること	セルフビルド ワークショップ オープンデッキ	草津 まちづくり交流広場
・ミニ門松づくり、餅つき、日本風づくり、そばづくり、コスモスまつり、女優の一人語り、十五夜コンサート、田舎一泊体験、すいとん祭り、人形劇等々	・江戸時代中期の典型的民家の復元、修理、三ツ間取り、広間型、大型囲炉裏を復元 ・伝統空間のあたたかい開放感、クーラーにない古い民家の心地よさ	・キーパーソンの清水靖枝氏とサポーターたち ・多くの高齢者の知恵と力を引き出す ・公園や民家が自分にとって居心地のよい場所とする住民たち	・市民たちが本当に「自分たちのもの」と感じている「まちの縁側」へといっそう育むこと	自立運営 ボランティア 古民家活用 伝承行事	長屋門公園 歴史体験ゾーン
・商行為を導入することで、それまで河岸に縁のなかった人々が訪れるきっかけとなり、空間の魅力に気付く ・カフェを利用する人と歩く人の間の関係性	・ウッドデッキ、販売ブース、ピロティなど場所により特性がある ・樹木が育って河岸緑地は、都市のオアシスとしての要素を備えている	・地元住民と事業者がキーパーソン ・地元女性の花壇づくり、町内会も参加 ・川を次世代に体験させたい	・地域全体としてオープンカフェ通りの環境づくりが育つこと	オープンカフェ 飲食行為 都市のオアシス	京橋川 オープンカフェ通り

れた関係を育んでいく。人々は、共通してどんな暮らし方を目指すかということに能動的であり、「自立した個人の存在と、もたれあいではない創造的化学反応」

(⑥ギャラリー ライク・エア) がおこったり、「知恵と技の出しあい」「共に楽しみ継続していける活動」

(⑬秋津コミュニティルーム) を大切に、「市民たちが本当に「自分たちのもの」と感じとる<まちの縁側>へといっそう育むこと」(⑮長屋門公園) のような能動的まち育て志向がみられる。<まちの縁側>は、市民の生きる力(人間力)を育くむ場であるとともに、それは、「場所の力」と「人間力」がお互いに浸しあう関係を紡ぐ場である。

3.8 今後の課題

<まちの縁側>は、共通して、ストック空間の活用によって「場所の力」と「人間力」が高められ、それを通して住宅市街地再生、コミュニティ活性化に一定の効果をあげる可能性を秘めていることがケーススタディを通して明らかとなった。

今後の課題として、「住民主体のタウンマネジメントへ」(①ふれあいPUB)、「中心市街地の再生効果への波及」(⑨北の屋台)、「行政、企業、学校、NPO 等との連携」(⑩らくらくえんオフィス)、「仮設から常設へ」(⑫西小中台オープンカフェ)などがあげられており、時をかけて、ヒト・モノ・コトの相働く場としての<まちの縁側>活動の持続的展開が待たれている。



図 4-2 「まちの縁側 MOMO」は幹線道路沿いの戸建住宅・旧歯科医院(写真手前)を改装して活用している



図 4-3 NPO 理事会の前は、必ず「キッチン石川」の手づくりの食事をいただく



図 4-4 月1, 2度行われる「縁側サミット」

が名古屋の市民活動にも関わり、「古い着物には思い出がしみついているもんや。作り直しているうちにその記憶がよみがえり、新しい思い出が紡ぎだされていくんや」といいつつ、集まった女性たちに手ほどきをする。

彼女たちは捨てられる(かもしれない)ものに新しいカタチを与える作業を縁側で日差しをあびつつ夢中になっていく。思い出に残る古布が突然に美しい愛らしいものに変化するとき、心の中にやさしさが溶け始める。Representation(表現)は、人々に美しさや慈しむ心の感覚回路をひらいてくれる。

ここで表現されたものや先に述べたようなギャラリー用の制作物がMOMO空間に展示されていく。そこに居合わせる人々の間には生命へのいとおしみや美しいものに趣く心が発露し、お互いの応答過程を通して、その印象(Impression)を言葉として発話(Expression)していくうちに、表現・制作されたものの意味することが人々の心の中にRepresentation(表現、再現)されていく。

捨てられるものに生命を与える表現・制作の相互評価・交流を通して意味することがRepresentation・再現されていく高次元空間では、かかわる人々の間に共感の世界がひろがっていく。共感はどうなにか短い時間であっても、人々を心の習慣・常識から解き放ち、新しい価値や意味に触れさせてくれる。その瞬間、人々の間にお互いをRespect・敬愛する心がにじみはじめる。表現・制作、評価・交流の流れは、ヒトとヒトの間に相応敬愛の関係を生み出す。

4) おもむきの心を促す

「まちの縁側MOMO」はささやかな場所でのささやかな試みが始まったばかりであるが、そこにはReincarnation(場所に魂をよみがえらせる)、Representation(表現)、Respect(敬愛)という場所の力と人間力の相互浸透するコミュニティ空間形成のソフトなキーワードがかくされている。

これらのキーワードの背後には「縁側サンス」があると思う。ここでいう「縁側サンス」とは、内と外の間、

そして自己と他者、人間と自然、人間と人工、過去と未来の間にゆるやかに溶け合ったリバーシブルな相互に反転しあうような開かれた関係づくりに趣く態度であり、そうした柔らかな関係の趣に共感する心のことをいう。

英語のsenseが「感覚」、「意味」という2つの意味しかないのに、フランス語のsens(サンス)には、それらに加えて「方向」という意味があり、日本語には「おもむく」「おもむき」(赴・趣)と、もっとニュアンス豊かな言葉がある。

関わる人々の間に共通のsens、おもむき、方向感を分かち合うめぐみの状況が生成する時、ヒト・モノ・コトの間に滑らかなめぐりが作動していく。

5) 事実と感覚との融合をもたらすまちの縁側>

「まちの縁側」とは、事実的なものと感覚的なもの、自己と他者、過去と未来がゆるやかに融合する柔らかな関係の「おもむき」(感覚・意味・方向)に共感する心を回復・再創造するコミュニケーション空間である。

Reincarnation(場所の魂を甦らせる)実現の背景には、古い空間と古材を見事に生かし新しい価値を創造しえた、Before&After Designにかかわった設計者のおもむきへの配慮がある。創造的表現には既存の空間が潜在させているおもむきをもっと強力に表現することが必要である。

一方、Response・応答することに日常的に赴く市民の間柄には、言葉によるコミュニケーション、ふるまいの共有化によるコミュニケーション、食事をこしらえる側と食べる側の発生するおいしさの感覚的なものを分かち合うコミュニケーションなどが生まれる。そのことを通して、近代・現代が損なっている感覚的なものと事実的なもののギャップをうめるおもむきの心を回復・再創造してくれる。

以上のように、「まちの縁側MOMO」には古い戸建住宅の改装・再活用によって、場所の力と人間力の相互活性化、とりわけ、ふるまいと言葉と表現と空間が一体化した場所が実現している。それは、現代が喪失している人々のおもむきの心を促す身体性のある高次元空間としての<まちの縁側>の創造として注目される。

4.2 「笑顔 Co-mix」における共食の場

―元気高齢者が教える「手をかけた料理」と要支援高齢者との「共食」

元駄菓子屋、散髪屋などのコミュニケーションの生みやすい場所の力を生かして、「食」という人間の生きる力を根源的に高めてくれるふるまいを共有している「笑顔 Co-mix」を取りあげる。

1) 「食」の文化とNPO活動

近代化による効率性追求のもとに切り落とされ、失われてきたものの一つに「料理に手をかける」と「共に食べる」ことがある。「手抜き料理」と「孤食」という流行語が代表する世の中で「食」の文化の貧弱化は子どもたちの教育・人間形成にも大きな影響を与えていると考えられる。

NPO「笑顔」では夏休みの企画として小学生の子どもたちを対象とする料理教室を開き、出来上がったお料理をデイサービス利用者と共に食べる企画をしてきた。

摘んできたよもぎを使ってのだんご、日本料理の基本技術の全てが含まれる白和え、忘れられつつある野菜を使った冬瓜のスープ煮などを子どもたちに教えながら、「食」の文化的奥深さや、「食」でもてなす心や、「食」を共にする喜びを感じとる機会と体験を提供した。

ここに関わる3者はそれぞれが、自分の立場での意義と喜びを見出している。

2) 関わる3者それぞれが見出した「共食」の成果

(1) 元気高齢者

- ・孫世代の子どもに料理を教える機会を得て、企画段階から張り切る（内面的エンパワーメント）。教える、育てる、全プロセスに喜びを見出す
- ・料理好きな人が特技を披露して自ら楽しむ機会
- ・要支援高齢者を支える自分たちの役割を確認する生きがいを感じる
- ・お互いを知らない地域の人々に出会いの場を提供する喜び

(2) 要支援高齢者

- ・孤食ではなく「共食」であることの喜び
同世代の仲間だけでなく、孫世代よりも若い子どもたちと食べることは楽しさが増す。食欲が増す。いつもよりたくさん食べられる、健康であることを実感する（“老い”の克服）
- ・他の話題では他世代とのコミュニケーションがとりにくくなっている高齢者も自分達の時代の食経験を語ることは可能で、社会からの疎外感を無くす
- ・もてなされるうれしさ
- ・食や生活文化の伝承（食事の前後に戦後の体験談なども話す）

(3) 子ども

- ・料理を習う、遊び感覚の学習
- ・自分の母親たちが作らないおかずや食材との出会い
- ・地域の大人との交流、先生や親とは違う大人の存在への認識
- ・接したことのない要支援高齢者と共に食べながら過ごす経験（高齢者を“知る”）



図 4-5 「今日も元気で会えてよかったね」と食前酒で乾杯

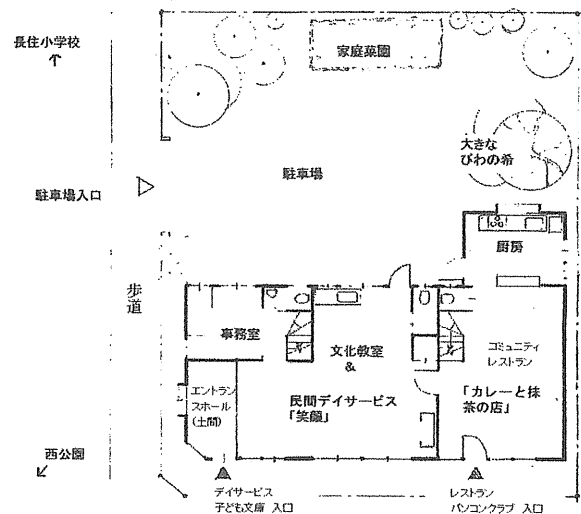


図 4-6 NPO「笑顔」配置図兼1階平面図

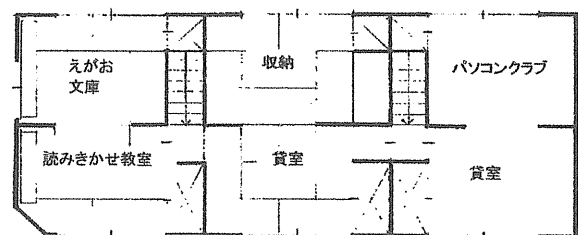


図 4-7 2階平面図

3) 共に食べる時間をより豊かにするためのプロセス

(1) 子どもたちが「食」を通して人を「もてなす」こと；食べる行為だけではない準備と食後のたのしみの大切さを体験する

・NPO「笑顔」の近所の人（花を育てるのが趣味の人）の庭に咲いた多種の花を朝摘み取って届けてもらい、早めにデイサービスに来る要介護高齢者と子どもたちが一緒になっていくつもの花瓶に生ける。花の名前を教えあったり、取り合わせを相談しあって、食卓に飾る花を準備しながら互いに少しずつ打ち解ける。

(2) テーブルセッティングなどの心遣いも学ぶ

・食卓の座席に、「笑顔」の裏庭でとってきた葉っぱに名前を書いた紙をおき、高齢者と子どもたちが混ざり合って座る。一緒にひとつの食卓を囲む喜び。
・食卓を華やかにする演出。冬瓜の皮で作ったスूपボール。丸いコロッケをりんごに見立てて庭の木の葉っぱをさす。

(3) 食事前後の活動も高齢者と共に行う（行為を豊かにする共感の時間の流れ）

・食後は地域のボランティア歌手とピアノによるミニコンサート。イタリアやドイツの歌を鑑賞した後「夏の思い出」など、子どもも高齢者も一緒に歌える歌を皆で歌う。

(4) 心身の弱っている要支援高齢者が地域に暮らし続けることの意味を、「共食」を通して子どもたちとともに多角的な視点から捉えなおす。

4) 「共食」の場における「まちの縁側」的コミュニティ空間のしくみ

(1) 上記の企画による共食は、心豊かな生活の創造と人間の共感、子どもの体験学習、高齢者の記憶の呼び覚まし、文化の確認、生きる喜びを分かち合える「まちの縁側」活動であると言えよう。この活動は、子ども、元気高齢者、要支援高齢者がそれぞれに自分の居場所をもちながら、他者と関わりあう欲びを体感しつつ、そこに小さなコミュニティを育成しているプロセスである。交し合う言葉や視線や笑顔のなかに、お互いの信頼やつながりを築いていく。特に要支援高齢者にとって、子どもをはじめとするいろいろな世代の人が集まることの中心に自分がいることにより、高齢者も地域社会の一員であることの安心を感じることがができる。味覚だけではなく五感をフルに働かせる共食の場での「おいしいね」という言葉に内包されるものは、身体性のある確かなコミュニティ空間としての「まちの縁側」の存在である。

(2) 「共食」に関連するものとして、最近コミュニティレストラン「カレーと抹茶の店」をオープンした。その趣旨はデイサービスや多種のクラブに来る以外の人々にも気軽に立ち寄るサロンを設けることである。そこでは、「食べる」ことをきっかけにコミュニケーションを生み、人々の出会いと情報共有を促す。「食」が介在することにより、おしゃべりが弾み、心を開かせる効用がある。サロンは自由な雰囲気であり、それは縁側本来のもつ場所の力としての空間的豊かさと偶発的な出会いの可能性に、身体的動きと人間関係の内外への拡張を相乗させ、場所の力と人間力の融合としての「まちの縁側」となるであろう。

(3) こうしたしくみを図化すると、図4-8のようになる。ここには要支援高齢者と元気老人ボランティアと子どもたちの幼老融合が食を媒介に成立していることがわかる。高齢者と子どもたちはそれぞれの立場で共食の輪のなかで楽しみを見いだしている。また、元気老人たちは、その中心的役割を果たすことにより生きがいを持ち、食育における高齢者支援は、要介護者に対すると同時に進められている。

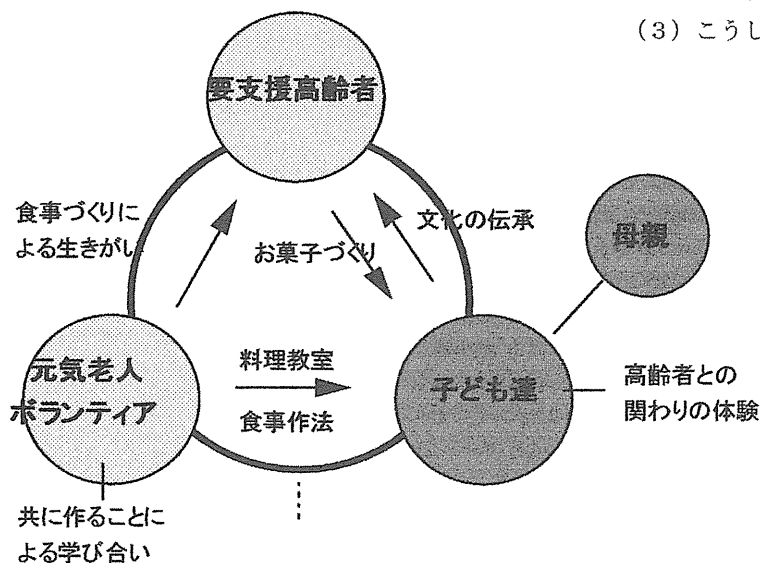


図4-8 共食の輪

5. 結び「作られたもの」から「作るもの」への変容

＜まちの縁側＞とは、内と外の境界のとけた、小規模多機能混在の、出会いと交流のある柔らかい場所のことである。本研究では、その典型事例 16 のケーススタディと 2 事例の詳細考察を通して、＜まちの縁側＞の必要性と可能性の論拠をあきらかにしてきた。全体を通して＜まちの縁側＞特性と、それが高齢少子社会の住宅市街地再生に基本的にどのような潜在的効果をもたらすのかについて言及し、結びにかえたい。

＜まちの縁側＞づくりは、捨てられているもの、あるいはあまり利用されていない空間が新しい状況のもとで人々の出会いと交流のあり方を求めて、ヒト・モノ・コトの相互作用豊かな高次元空間としての「場所の力」が回復・再創造されるプロセスである。それは、従来の専門家主導によって「作られたもの」（ハード）から、市民主導、又は市民・専門家・行政の協働によって、ヒト・モノ・コトのからみあいの豊かさを「作るもの」（ソフト）へと変容する主体的な能動的な営みである。
注3)

＜まちの縁側＞の外面的あらわれは、主に既存空間の改変・リノベーションの成果として多様な小規模多機能な場であるが、その一方、その内面的特性は「作られたもの」から「作るもの」への変容過程にある。「作る」とは、モノ・ヒト・コトの結合を変ずることである。

例えば、「まちの縁側MOMO」では、使われなくなった木造家屋のモノもっていた資源性を生かして親密な会合・展示空間に改変し、オーナーのみならず新たにここに参加する人々にも何かなつかしい感覚を呼び覚まし、場所の潜在的力が回復・再創造されていった。「作られた空間」の主体的改変を通して、記憶を呼びさますという人間のイノチとしての意識を「作る」過程が生まれてきた。

また、「笑顔 Co-mix」では、古い店舗がかもす「下町的な人情味のある」「生活そのものを包みこむ」場を生かして改造されたデイサービスには、お年よりだけでなく、子どもたちを対象とする料理教室が開かれ、食を通じて幼老融合の生活の価値が顕在化してきた。そこにも「作られたもの」に受身的に従うのではなく、新しい生活の価値を「作る」ことに能動的に関わる関係が生まれている。

＜まちの縁側＞とは、「作られたもの」の豊かさを生む産業・技術・制度化の網の目が過剰に人々の生活世界を侵蝕している時代にあって、生活者ひとりひとりが他者との間の自由でゆるやかな関係づくりによって、人間的な居心地のよさを「作る」過程であり場である。

現代社会が、「モノ・カネ・セイド」偏重と「作られたもの」過剰の社会的しくみを押しひろげたために、高齢者や子どもにとって生きにくい状況とまちの元気衰退

という現象が起こっている。それに対して＜まちの縁側＞は「ヒト・クラシ・イノチ」尊重の視点から、モノ・ヒト・コト・イノチの相互作用の関係性を豊かに市民が主体的に「作る」という新しい状況づくりをもたらしている。そのことによって現代社会特有の危機を乗り越えさせる可能性をもっているのではないだろうか。

これまでの社会的課題への対応・対策は、研究的にも政策的にも、住居・福祉・児童・環境・景観・商業・経済などの各領域を縦割的にとらえてきている傾向が強いが、＜まちの縁側＞発想は、領域横断的であり、「場所の力」回復・再創造と「人間力」育くみを相互浸透的にとらえる意味＝感覚＝方向（おもむき）に特徴がある。

本考察を通して、＜まちの縁側＞は、ヒト・モノ・コトが相互的で相働く「場所」的關係と、それらが相働くように志し行動することに楽しさと生きがいを見出し、自己と他者の間の柔らかい関係のおもむきに共感する「人間力」の両面を育くむ点で、高齢少子時代の住宅市街地再生をめぐる社会的課題を横断的に解きほぐす潜在的可能性を秘めていることが明らかとなった。＜まちの縁側＞は、「場所の力」と「人間力」の相互のからみあいを豊かに「作る」点において驚異的な多様性をもっているが故に、コミュニティ再生における内発的エネルギーをはらんでいる。

本研究は、＜まちの縁側＞がそうした社会的・計画的意義をになっていることに向けて未だ初歩的考察の段階にすぎないが、今後「作られたもの」から「作るもの」への変容能力をもつ多様な＜まちの縁側＞の実践的研究をさらに継続していきたい。

＜注＞

注1) ドロレス・ハイデン著、後藤春彦他訳：場所のカーバブリック・ヒストリーとしての都市景観、学芸出版社、2002年

注2) 延藤安弘：出会いのデザインとしての＜まちの縁側＞、C&D132号、2003年12月、では次のように定義した。＜まちの縁側＞とは、地域の諸資源（人間、歴史、文化、景観、産材、資金、組織など）を生かし、人間本来の創造的営みを活性化させる柔らかい出会いの場所である。

注3) モノ・ヒト・コトの「相働く場所」の哲学を考察した西田幾太郎は、みずからを世界が創造される「場所」にまで高めるためには、「作られたものから作るもの」への変容の重要性を述べている。清水高志：セール、創造のモノダーライブニッツから西田まで、冬幻舎、2004年、pp204-240

＜研究協力者＞

三矢 勝司	(NPO 法人まちの縁側育くみ隊)
渡邊 丈紀	(同 上)
藤原 貴代	(同 上)
古池 弘幸	(同 上)